

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成21年8月26日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 小 柳 敦 史

事業区分	平成20年度・長期派遣助成	
研究課題名	宗教学成立期における「宗教的アプリアリ」概念の思想史的研究	
受入機関	ドイツ・ミュンヘン大学(Ludwig-Maximilians-Universität München)	
渡航期間	平成20年7月31日 ~ 平成21年7月31日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	2,550,000円
	使用した助成金額	2,550,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	渡航費: 200,000円
		宿泊料: 624,000円
日当: 1,726,000円		

成果の概要

平成 20 年度長期派遣助成 小柳敦史

研究課題：宗教学成立期における「宗教的アプリアリ」概念の思想史的研究

報告者は平成 20 年度長期派遣助成を受け、ミュンヘン大学 (Ludwig- Maximilians-Universität München) プロテスタント神学部でフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ教授及びアルフ・クリストファーゼン教授の指導の下で研究調査を行った。両教授は社会的・歴史的コンテクストを重視した厳密なテキスト分析により、キリスト教神学を中心とした近代宗教言説研究の第一人者である。初期宗教学において「宗教的アプリアリ」議論の中心に位置する人物の一人である神学者・宗教哲学者エルンスト・トレルチの改訂版全集が、グラーフ教授が編集責任者として刊行中であり、近代ドイツの宗教言説および「宗教的アプリアリ」概念の研究を進める上でミュンヘン大学プロテスタント神学部において指導を受けられたことは非常に有意義であった。

両教授との相談により、報告者の研究課題に取り組むために、まずは「宗教的アプリアリ」論の中心人物であり、報告者の従来の研究対象であるエルンスト・トレルチの思想研究をまずは集中的に進め、その後トレルチの議論を対照項としながら他の思想家と比較研究を進めていくことになった。

第一点のトレルチの思想研究としては、トレルチが晩年に展開した歴史哲学に取り組んだ。晩年の主著『歴史主義とその諸問題』が改訂版全集に収められ、その意義が改めて見直されていること、20 世紀初頭の宗教言説を取り巻く思想史の状況を鑑みるに、「宗教的アプリアリ」の議論に対しても歴史主義の問題は大きな影響を与えているからである。報告者は、1910 年代～1920 年代ドイツにおける反歴史主義的思想についてのクリストファーゼン教授の研究に示唆を受けながら、トレルチの思想においても同時代の反歴史主義に対する同調が見られ、そこから彼の歴史哲学における「決断」や「現代的契機」の重要性を理解すべきこと、一方でそのような反歴史主義の危険性に対するトレルチの危機感を無視してもならず、現代的・決断的モチーフと歴史的・反省的モチーフの両面をバランス良く解釈することが重要であることを明らかにした。従来の研究においては、トレルチの「決断」のモチーフは彼なりのキリスト教信仰やキルケゴールやニーチェ受容と結び付けられてきたものの、同時代の反歴史主義との連関には十分に目が配られていなかったのである。また、日本におけるトレルチ研究でもトレルチ思想の未来志向性が重視される傾向にあり、歴史的・反省的モチーフの重要性を改めて評価する必要があると感じられた。以上の結果は 2009 年度 8 月の日本キリスト教学会学術大会で発表を行う予定である。

第二点の比較研究としては、同時代の思想家ルドルフ・オットーとの比較を行った。オットーは『聖なるもの』の著者として高名であり、日本では宗教哲学者、あるいは宗教現象学者として知られているが、本来オットーはプロテスタントの神学者、しかもエルンスト・トレルチと同じく宗教史学派に与する神学者として理解されるべき人物である。すなわち、思想史的背景が近い思想家から比較を始めるのがスムーズであるという判断であった。出発点としたのは、オットーの『聖なるもの』に対するトレルチの書評論文である。そこではまさしく「宗教的アプリアリ」概念が議論の主題になっており、当時の宗教言説に

において「宗教的アプリアリ」概念が重要なテーマであったことが理解される。検討を進める上で報告者が注目したのは、トレルチが全うな批判をしている点よりも、オットーとトレルチの議論がすれ違う点である。なぜならその点において、「宗教的アプリアリ」をめぐる論争の幅が示されるからである。そのすれ違いが現れるのは、オットーに対するトレルチの批判の核心である「合理性 / 非合理性」の関連についてである。「宗教的アプリアリ」のアプリアリ性に密接に関わる「合理性」及びその対概念である「非合理性」の理解が両者で異なっているのである。基本的な合理性 / 非合理性理解が異なりながらも、合理性と非合理性の関連を追究するというモチーフは共通しており、概念の差異と関心の共通性を捉えることが重要であることが明らかになった。我が国では近年藤原聖子がオットーの「聖」概念を集中的に論じたが、そこでは非合理性の側面が強調され、合理性と非合理性の連関というモチーフが十分に検討されていなかった。これ以上の検討は、それぞれの「合理性 / 非合理性」理解を明確にしなくてはならず研究の途上ではあるが、現時点での成果を 2009 年度 9 月の日本宗教学会で発表予定である。なお、ルドルフ・オットーに関する研究は我が国での盛んな受容に比べてドイツ本国では進んでおらず、本研究をさらに進めることは世界的な研究状況を更新することにも繋がるものと期待される。

以上二点の研究に加え、今後さらに他の思想家との比較研究を進めるための文献を入手することが出来た。今回の研究を基礎としてこれらの資料を使い、博士論文をまとめていきたい。また、研究指導の合間には両教授より宗教言説の研究における歴史的コンテクストを重視した研究の意義、それを西欧とは異なる歴史的な文脈を持つ日本において研究を進める意義について勇気を頂いた。今回の留学で得た方法論、資料、見識を元に研究を進めていきたい。